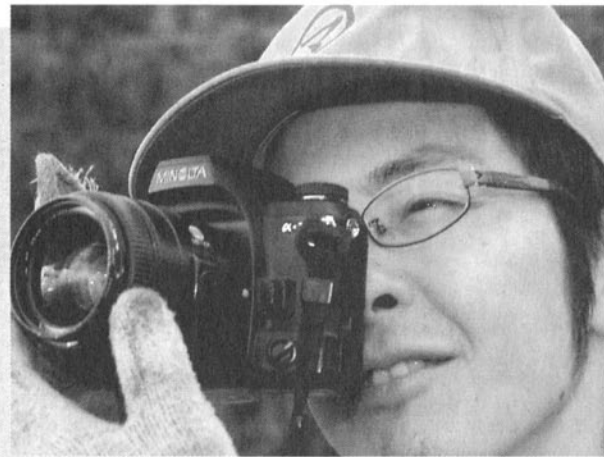


傍らにいつもカメラ。働いて、写真撮って、結構忙しいからね。



農作業の合間、真穴の風景をカメラに収める嶋田

# 年

明けから春まで沖繩でサトウキビ引。いったん実家で引っ越しのアルバイトをして6〜8月は北海道の昆布干し、9〜10月は道内でサケをさばく通称「シャケバイ」。そして11月から真穴でミカン収穫。嶋田祐悟(31)神奈川県川崎市の昨年サイクルはおおよそこんな感じだ。

# 不安あるけど今は夢中

日本芸術学部で写真を学んだ。「就職せずにフリーターのほうがいいんじゃないの」。周囲の級友はそんな雰囲気、写真家の夢を抱え、

傍らにはいつもカメラ。いつか写真展を開きたいと思う。各地で撮影した写真のファイルを広げると、空演としたサトウキビ畑、サケの切り身「とほ」を寒風にさらす光景、アルバイト仲間の素顔が収められていた。真穴は2回目の訪問。「最初の時は撮った写真が少なかったし、ミカンも食いたいなと思って」将来の不安はないのか。「ありませんね。結婚とか、どうなっちゃうのかなど。でも今は夢中。働いて、撮りためた写真をプリントして、結構忙しいからね」。沖繩で気に入って購入した三線(さんしん)をボロンと鳴らした。

# 自然と私がつながる



仕事が終わると、近所の寺に足が向いた。見事なイチヨウの古木。ここがお気に入りの場所と野村

# 上

空で鳥がゆくり弧を描く。潮の香り。

足裏に土の感触。葉陰から跳びだしてくる虫たち。大阪育ちの野村典子(28)は真穴でのミカン摘みの間、そんな二つ二つに心を弾ませた。

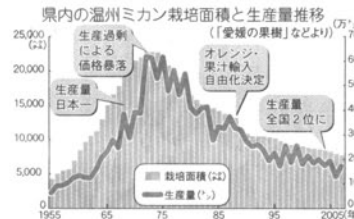
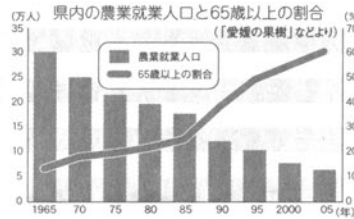
そろそろ絵を描いてみようかな。美術短大を卒業してから、8年近く絵筆を握っていない。自然はこわばった心をほぐし、絵への思いをよみがえらせた。

3歳から15歳まで通った。

固まった心ほぐれ 感性を取り戻した。また絵を描こうかな。

た絵画教室。スペイン編りの陽気な先生は生徒の感性を大切に。真っ白なキャンパスは自分だけの聖域。自由さが肌に合った。高校はまるで違った。飛んできた。邪魔や、学

ガチガチに固まり、そん



年には5%を割り込んだ。

一方、県内の農業就業人口は1965年には約30万人と県人口の2割を占めたが、40年間でおよそ5分の1にまで減った。若い世代の農業離れから従事者は高齢化の一途をたどり、就業人口に占める65

だが72年の生産過剰による価格暴落をきっかけに、イヨカンなど晩かん類への園地転換が促進されるなど、需給調整のための減産施策が続くようになる。消費のピークも70年代だった。総務省家計調査(全国)によると、一時は1人当たりの年間購入量が20%あったが、2006

## ■温州ミカン生産データ

温州ミカンの生産は縮小傾向にある。愛媛のミカン産業は1960年代に急成長を遂げ、「日本一」の称号を手にした。70年代前半、栽培面積は2万3千haに迫り、生産量は60万tを超え、

な自分もいやになった。このころ救ってくれたのは仲間とのキャンプ。森で過ごす、不思議な気持ちと和らぐ。こんな生活が向いていくかな。同級生がデザイナー会社などに就職する中、短大を出た野村は絵と距離を置き、自然に溶け込む生活を求めた。沖繩・西表島のベンシヨンに住み込んで働いたり、水道もない北アルプスの小屋に行ったり。インドやネパールを何カ月も一人で歩いた。ミカンアルバイトはその延長線上。

「自然の中にいると、心が周囲の草木や動物たちと一つになって無限に広がっていく。いつの間にか、みずみずしさを取り戻していた。悩んだこともあったけれど、その先に今の自分がある。無駄じゃなかった。アジア旅行で知り合った彼氏と、しばらくしたら田舎で暮らそうと決めた。「動物や植物、虫たちと一緒に暮らしたい。子どもができた。自然いっぱい絵本を描いてあげようと思います」

校から出て行け、3年間、自分一人がこんな調子。目標だったはずの美術短大に入ったころには、描くのがとてもつらくなっていった。心が